
ポケットモンスター 幼馴染の受難

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター 幼馴染の受難

【Nコード】

N4986S

【作者名】

風

【あらすじ】

『ポケットモンスター』。縮めて『ポケモン』。

この世界に存在する不思議な生き物達。彼らは人間と共に暮らし、戦いながら生きている。

この物語はそんなポケモン達と共に、最強のトレーナーを目指す二人と少年少女の物語……

・・・ではなく、本当は偶然再会した男女の幼馴染である俺が二人によって巨大な組織との戦いに無理やり巻き込まれていく話だ。
・・・ああ、何でこんなことになっちゃったんだろ。俺は手持ちの皆と木の実を育てながらのんびり生活したいだけなのに・・・
基本的に土日更新です。

プロローグ（前書き）

初めまして！ 風です！ 初投稿なので若干おかしな文章かもしれません！
んが、感想をもらえるとうれしいです！

プロローグ

ここは自然豊かなホウエン地方。俺、シズクは滅多に見ることのできないと言われているマボロシ島にのみ生えていると言う珍しい木の実を求め、何日も待ってからようやく相棒の『エーフィ』の『ファイ』と共に足を踏み入れた。

「・・・おっ！あれがチイラの実か！ようやく見つけたぞ〜！」
島の端にある海藻のような木に生っている赤い木の実。資料に書いてあったとおり、間違いなくチイラの実だ！

「採取採取〜♪」

生っていた木の実は三個。一つはまた埋めなおしておいて、残り二つは頑丈な容器に入れ、カバンの中にしまう。

「ん〜、ホウエンでしか見つからない木の実はこれで最後か・・・よし！久しぶりに里帰りするか！」

腰についてる五つのボールのうち一つを投げると光と共に『フライゴン』の『フライ』が姿を現した。

「フライ！シンオウ地方へ！」

『フライ！』

ファイと共にフライの背中に乗り、指示を出すと、フライは大空に飛び立った

設定（前書き）

7月10日レンカ、ハジメ、ミナツ、ミコトの手持ちを変更しました！

新キャラ登場や手持ちが増加、変化した場合更新します。すでにフルメンバーだが、登場してない手持ちは？？？で表示します。

設定

舞台

シンオウ地方

技設定

普段は覚えた技をすべて使えるが、ジム戦やリーグ戦等の公式戦では、使える技のうち4つしか使用できない。

リーグ説明

その地方のジムバッチを全て集め、予選を勝ち抜いた者のみがリーグに出場。リーグはトーナメント方式で行われ、2位〜5位は四天王への挑戦権が得られ、四天王を全員倒せば新たな四天王の一人になる。1位は四天王とチャンピオンへの挑戦権が得られ、チャンピオンを倒せば新たなチャンピオンとして君臨する。

人物設定

シズク（♂） 16歳

手持ち…エーファイ♂（ファイ） フライゴン♂（フライ） デン

リュウ♀（リュウ） ??? ? ? ? ? ? ?

説明…髪も瞳も黒で、腰まである髪をゴムで適当に縛っている。顔は良くも悪くもない。

性格は面倒くさがりやだが、自分の好きなことには全力で取り組む。また、昔は幼馴染二人の起こした騒動の後始末のためあちこちを走り回った。

将来の目標は木の実の栽培、販売をすることで、スクール卒業後木の実採取と二人から逃れるために行方を眩ましたが、久しぶりにシンオウ地方に戻ってきたところを別の地方に行っていると思っていた幼馴染に発見される。

意外に面倒見が良く、スクール時代はかなり慕われていたことを本人は知らない。

レンカ(♀) 16歳

手持ち…リザードン(色違い)♂(ヒリュウ) レントラー♂(ライガ)
ルカリオ♂(ハテン) ミロカロス♀(ミズキ) ??
????

説明…髪は鮮やかな赤色で、縛ったりせずになますぐ伸ばしていて、瞳は黒っぽい赤で、吊り目のかっこいい系の美少女で、スクール時代は男女からの告白が絶えなかった。気が強く、曲がった事が嫌いで、意外に照れ屋。幼い頃ポケモンハンターから自分とハジメ助けてくれたシズクに恋心を抱き、目標になっている。

将来の夢は最強のトレーナーとシズクの可愛いお嫁さん。

スクール卒業後、行方を眩ましたシズクを探す為にハジメと一緒に旅に出て、二年前にカントーリーグを制覇し、四天王とチャンピオンを倒した。そして、新チャンピオンになる筈だったが、辞退し、ハジメと一緒にシズクを探す旅を再開した。巷ではハジメと恋仲とちまた言われている。

ハジメ(♂) 16歳

手持ち…ジュカイン♂(リョクオウ) トロピウス♂(リョクヨク)
チェリム♀(サクラ) ルンパッパ♂(ハスハ) ??? ???

説明…若草色の短髪で瞳は薄い青色の美青年で、スクール時代は男子の中で一番モテていた。性格は穏やかで正義感が強く、仲間思い。幼い頃ポケモンハンターから自分とレンカを助けてくれたシズクは憧れであり、目標。

将来の夢はブリーダーで、大人になってもシズクやレンカとおんなじ関係でいたいと思っている。

スクール卒業後、行方を眩ましたシズクを探す為にレンカと一緒に旅に出て、二年前にカントーリーグで準優勝し、四天王を倒した。

そして、新四天王になる筈だったが、辞退し、レンカと一緒にシズクを探す旅を再開した。巷ではレンカと恋仲ちまたと言われている。草タイプのポケモンを好んで使う。

ミナツ（♀） 13歳

手持ち…ポツチャマ♂（ポポ） ラルトス♀（ララ） ケイコウオ♀（ココ）

説明…ゲームのダイヤモンド・パールの女主人公と同じおんなじ恰好。冬の時期とキッサキ方面に行く時はプラチナの時の恰好。明るく、前向きな性格で、旅を始めたばかりの新米トレーナー。二年前、チャンピオンと戦うレンカをテレビで見て憧れるようになった。
将来の夢は未だ定まらず。

ミコト（♂） 13歳

手持ち…ナエトル♂（ミドリ） ズバット♂（パプー） ブイゼル♂（レン）

説明…ゲームのダイヤモンド・パールの男主人公と同じおんなじ恰好。冬の時期とキッサキ方面に行く時はプラチナの時の恰好。スクールを首席で卒業し、ナナカマド研究所で研修も兼ねて博士の助手をしている。厳しい突っ込みを放ち、笑顔で黒いオーラを出す。
将来の夢は研究者になり、自分の研究所を持つこと。

ミリー（♀） 15歳

手持ち…ボーマンダ（♂） ハガネール（♂）

説明…世界有数資産家のバーネット家の一人娘。蒼目に金髪ロールの典型的なお嬢様で、二年前はどんなポケモンもお金で買えると思っていたが、カントーリーグを制覇したレンカのヒリュウを買い取ろうとしたが断られ、トルを仕掛けるが惨敗。その際に自慢の金髪を焼かれ、チリチリパーマにされ、笑いものになった。それ以降はレンカに復讐心を燃やし、自分で育てたポケモンで倒すことを決意

し、自らポケモンを捕獲し、育成するようになった。

クラウド（♂）20歳

手持ち…オオスバメ（♂） アブソル（♀）

フロンティアブレインカトレアの執事コ克蘭の弟で、ミリーの専属執事。容姿はコ克蘭にそっくりだが眼鏡をかけていない。眼鏡を外すとコ克蘭そっくりでほとんど見分けがつかない。

ミリーが五歳の頃に仕え始め、ミリーのブレイキ役でもある。

打倒レンカを目標に掲げ、自らポケモンを捕獲し、育成するミリーを見ていい傾向だと思い、密に感謝している。また、本人も一度ハジメに敗れており、いつか彼を倒したいと思い、ミリーと共に特訓している。

第一話

「とくちやくつと！」

あの後フライでミナモシティに飛び、そこから船に乗り、シンオウ地方のミオシティに。そしてようやくシンオウ一の都会であるコトブキシティに到着した。

「やっぱ四年も経つと変わるな。」

四年前に比べると建物も増えてるし、テレビコトブキももっと小さかったんだけど・・・。

「それに街中でバトルをするようになったみたいだし」

右を見れば双子の女の子VS短パンの少年二人が、左を見れば二人のポケモンスクールの生徒がポケモンバトルをしている。

「くそ！この餓鬼ども・・・！」

「つ、強い・・・。」

あっちでは水色のおかっぱ頭で胸にGと書かれた服を着ている大人二名が少年少女に負けていた。・・・ってあれ？おかしいなあ少年たちの後ろにいる白、赤、若草色の髪にすぐ見覚えが・・・。

「くそ！こうなったら無理やり奪わせてもらうぞナナカマド博士！行くぞ！」

「「「おおー！ー！」」」

負けた一人が叫ぶとどこからともなく同じ格好をした人達がゾロゾロ現れ手持ちのポケモンを一斉に出した。ていうかやっぱりあの白い髪はナナカマド博士か。

「数が多いわね・・・二人とも下がってなさい」

「あの人たちは僕らが相手するよ」

少年たちが下がり赤と青の男女が前に出てボールを構える。

「『ヒリュウ』！」

「『リョクオウ』！」

女の方のボールから現れたのは色違いの黒いリザードン。男の方の

ボールからはジュカイン。

「焼き尽くさない！“熱風”！」

「“リーフストーム”だ！」

飛び掛かってくる大量のポケモンを木の葉の嵐と熱風がトレーナーと共にどこかに吹き飛ばす。

「あの黒いリザードンにジュカインってことはやっぱりあの二人・・・」

間違いなくあの二人だ。何で帰ってきてるんだ！別の地方にいると思ってたのに！！だがいると分かれば長居は無用！見つかる前にさっさと別の地方に・・・。

「「・・・ん？」」

げっ！こっち見た！

「「ああー！ー！シズク！」」

「さらばっ！」

くるりと反転し脱兎の如く走り出した瞬間。

「待ちなさい！」

聞こえた声。そして後頭部に走る痛み。薄れゆく視界の中で目に入ったのは宙を舞うモンスターボール。

最後に一言。

“モンスターボールは人に投げるものではありません。”

第一話（後書き）

次回、ナナカマド博士以外の4人の名前が明らかになります。

第二話（前書き）

今回で登場人物が結構増えます。

第二話

ミナツside

初めまして！私はミナツ！つい最近ナナカマド博士からポケモンを貰って旅に出た新人トレーナーです！早速私と一緒に旅をしている3人を紹介します。

最初はミコト君。博士の助手だったんだけど、私と幼馴染のカズマが旅に出る時博士に色んなものを見るように勧められ、私と旅に出ることになった。

次はハジメさん。ハジメさんはカントーリーグで準優勝するほどの実力者で、今年開催されるシンオウリーグに出場する為のジムバッジを集めている途中で、私達とはクロガネジムで出会いました。

最後にレンカさん。ハジメさんの幼馴染で、カントーリーグ優勝者です！ハジメさんと一緒に、クロガネジムで出会った私の憧れの人です！バランスのとれた見事な体型に吊り目がちな瞳！男にも怯まない強気な性格！まさに私の理想の女性です！

「いや、ミナツ君にミコト、それにハジメ君にレンカ君も助かったよ」

「いえ、博士が無事で何よりです」

「博士。やっぱり前も言ったように自衛のために何かポケモンを連れて歩いたほうがいいですよ」

博士の研究資料を狙ってきたギンガ団とかいう集団を私のポッチャマ（愛称はポポ）とミコト君のナエトル（愛称はミドリ）、それとハジメさんのジュカイン（愛称はリョクオウ）とレンカさんのリザードン（愛称はヒリュウ）で追い払い、私達はナナカマド博士と一緒にコトブキシティのポケモンセンターで一休みしています。

「うゝむ・・・」

「あのゝ一つ聞きたいんですけど・・・」

博士が悩んでいるようなので私はさっきから気になっていたこと思

い、

「この人誰ですか？」

“穴抜けの紐”でグルグルに縛られて（使い方間違ってると思う）
床で気絶している人を示す。

シズクと呼ばれたこの人は、ギンガ団を吹き飛ばした後、私達の後ろにいたこの人が名前を呼ばれ、逃げ出した瞬間、レンカさんがヒリュウの入っていたボールを投げ、見事に後頭部に直撃。気絶したこの人を縛りここまで連れてきた。

「んゝ、彼、シズクは僕達の幼馴染で」

ハジメさんは目を閉じ、懐かしむように言った。

「目標かな」

第三話（前書き）

更新遅くなって申し訳ありません！連休の間、連続投稿するつもりです！ではどうぞ！

第三話

目を覚ますと髪が逆立った赤鬼^{レンカ}が目の前で仁王立ちしていた。

「ようやく見つけたわよ。久しぶりねえ・・・!!」

「ひ・・・久しぶり・・・」

凄まじい怒気に思わず顔をそむけてしまう。

「こっち向きなさい。今までどこにいたの？もし、言わないなら・・・」

「い、言わないなら・・・？」

「焼くわよ」

「俺を焼き殺す気!？」

「安心しなさい。ちゃんとレアにするから」

「焼き加減の問題じゃねえ!どっちにしろ全身大火傷じゃん!!」

「問題無いわ」

「大有りじゃあ!」

「シズク。正直に言った方がいいよ?すでに後ろでヒリュウがスタンバイしてるし」

レンカと言いつけ合っている間にハジメが会話に割り込んできた。そして後ろを見てみるとヒリュウが何時でも火を吹ける状態だ。

「・・・はあ。分かりました、話しますよ」

俺は観念して四年間、何処で何をしていたか話すことにした。

・・・

「ふーん。ジョウトで二年間ぼんぐり、ホウエンで二年間木の実を探していたんだ・・・」

「まあな」

話し終え、ようやく縄から解放された俺は椅子に腰かけた。

「じゃあ次の質問」

「まだあんのかよ・・・」

もう終わりだと思ってたのに・・・。

「当たり前でしょ。何で4年前、私達に何も言わず一人で旅だったの？」

「なんだそんな事か。俺と二人じゃ目的が全然違うだろ」

「うっ・・・」

俺は木の実などの栽培。レンカは最強のトレーナー。ハジメはブリーダー。

レンカとハジメは育成の為の旅だが、俺は採取の為の旅。目的が全く違う。

「それなのに何でわざわざ言わなきゃならん」

「そ、それは・・・／＼／＼」

「シズクと一緒にいたかったからだよね？」

「ハ、ハジメ！／＼／＼」

言い淀んでいたレンカに代わり、ハジメが答えた。ていうか・・・。

「レンカ。それってつまり・・・」

「う、うん・・・」

間違いない。レンカは・・・

「また俺に厄介事に巻き込む気だな！」

「・・・は？」

忘れはしない！スクール時代、この二人のせいで俺の身に降りかかった厄介事を！二人に敵わない近隣校の不良に二人とよくいる俺に目標を変えてきた。レンカに振られた男女が俺がいるせいだと（何故かハジメではない）襲われた。その他にも説明できないほどこの二人の厄介事に巻き込まれた。

実は何も言わずに旅立ったのは、もう厄介事に巻き込まれるのは御免だからという理由もあるのだが言っても無駄だろう。なぜなら自覚がないから！

「・・・しゃ」

「・・・ん？」

「ヒリュウ!“ 火炎放射”」

「のわ！」

とつさに椅子から転げ落ちることで回避。俺が今まで座っていた椅子はただの炭になった。

「あ、危なく。レンカ！いきなり何すんだ！」

「乙女の心を弄んだ罪！死んで償え！」

「何のことだ！っていうかこんなことする奴のどこが乙女だ！」

「なんですってー！ー！！！」

この騒動はジョーイさんが怒鳴り込んでくるまで続き、その後、俺とレンカは揃ってジョーイさんから説教を受けた。

「何で俺まで・・・」

「元はといえばあんたのせいでしょ・・・」

「ちゃんと聞いているんですか！ここは公共施設なんですからちゃんとマナーを守って・・・！」

ちなみに、ハジメはヒリュウが火炎放射をした瞬間、子供二人を連れてポケモンセンターから逃げ出した。

第四話

「あ、足が・・・！」

「し、痺れる・・・！」

「ようやく終わったみたいだね」

ジョーイさんの説教が終わり正座を解いた俺とレンカは足の痺れに悶絶している中、ハジメが少年少女を連れて戻ってきた。

「てめ、ハジメ・・・！」

「一人だけ逃げるなんて卑怯よ・・・！」

「何言ってるんだい。暴れたのは二人だけでしょ？」

「いや、暴れたのはレンカだけ」

ハジメの言葉に反論しようと思ったが隣のレンカが睨んできたので口を閉じた。

「ところでその子達は誰なんだ？」

「ああ、この子達はミナツちゃんとミコト君。ナナカマド博士に言われてポケモン図鑑のデータを集めるために旅に出たばかりなんだ」

「そして、私達はそのサポートを依頼されたの」

足の痺れが取れたレンカが立ち上がってハジメの説明を補足してくれた。俺も立ち上がり二人に向き合う。

「初めまして！ミナツって言います！」

「初めまして、ミコトです」

「俺はシズク。その二人の幼馴染だ」

「ところでシズク。これからどこに行くつもりだい？」

「んー、そうだなー。久しぶりに帰ってきたからあっちこっち見て回るつもりだけど・・・」

「ふーん、そう。それなら・・・」

ハジメの問いに対する俺の返答を聞いてニコリと笑うレンカ。嫌な予感しかない。

「あんたも付いて来なさい！」

「断固拒否する！」

「あゝら。そんなこと言って、これが目に入らないのかしら？」
「なっ！それは・・・！？」

拒否した俺にレンカが見せたのは俺の手持ちが入ってるボール。ど
うりで腰のあたりが軽いと思った・・・！

「あんたには最初から拒否権なんてないのよ！」
「く、くそっ・・・！」

「これでまた三人一緒だね」

「ねえミコト君。シズクさんって本当に仲いいのかなあ・・・」
「さあ・・・？」

「私にはレンカさんが悪役に見えるんだけど・・・？」

「見間違いないと思うよ」

こうして俺は旅に（強制的に）同行することになった。

第五話（前書き）

今回までコトブキシティにいます。中々話が進まなくて申し訳ありません！

第五話

「さあ！ソノオタウンに向けてしゅっぱーっ！」

「「「おー！」」」

「待って」

レンカを先頭にソノオタウンに向かおうとする四人に待ったをかける。

「何よシズク、ノリが悪いわよ」

「いやだって、コレ何？」

『コレ』とは俺の首に付けられている物体。それは普通の人なら絶対に付けない。

「何って・・・首輪よ？」

「んなこたあ見れば分かる！何でこんな物を俺に付ける！」

しかもメタリックで、ご丁寧にネーム部分に『SHIZUKU』と書かれている。しかも鍵が掛かっていてびくともしない。

「逃走防止の為よ」

「俺は犬か！」

「だっ、大丈夫だよシズク！とってもオシヤレだよ！」

「そ、そうですね！チョーカーの代わりと思えば！」

「似合ってますよ（プツ）」

「ハジメ、ミナツ、それは無理がある。それとミコト！今こっそり吹いただろ！」

「ああ、ちなみに」

ゴソゴソとズボンのポケットから何かのスイッチを取り出すレンカ。ポチッ！ビリビリビリビリビリビリビリビリビリッ！！

「ぎいいいいやああああああ！！！！」

俺の全身を電流が奔り、電流が止まると、俺は黒い煙を出しながら倒れ伏した。

「それ、発信機と電流装置が付いてるから。逃げようとしたら電流

流すわよ」

「今流す必要なかったよね！口で説明するだけで良かったよね！」

「身をもって体験した方がいいと思って。あっ、それと逃げようとするたびに電流の強さあげるから」

「鬼！悪魔！ドS！人間失格者！」

「ポチッと」

「ぎゃあああああああああ！！」

再度流れる電流より、体中がマヒして口を開くことすらできなくなつた。

「さあ、今度こそしゅっぱーつ！」

「「「おおー！」」」

痺れて動けない俺をレンカが背負い、俺たちはポケモンセンターを出た。

この時、レンカが俺を背負った瞬間、嬉しそうに見えたのは気のせいだろう。

第五話（後書き）

次回、コトブキシテイから出て、ようやくバトルシーンに入ります。

第六話（前書き）

ちよつと変更しました。

第六話

コトブキシティを出た俺達は、現在204番道路で立ち止まっている。その理由はミナツとミコトの手持ちを増やす為。

「さて！今の時間帯、ここを出てくるポケモンは・・・ムツクル、ビッパ、スボミー、コリンク、ラルトス、ヒマナツツ、タネボー、ハスボー、クヌギダマ、キャタピー、ビードルってところね」

近頃では他の地方でのみ出現するポケモンもあちこちで見られるようになり、一つの道路でも結構な種類が生息している。ホウエンにもシンオウのポケモンがいたりするもんだからビックリだ。

「二人とも手持ちがまだ一匹だけだからこら辺で何か「あつ、僕は二匹いますよ」あれ、いつのまに？」

「クロガネゲートで捕まえたんですよ。ほら！」ミコト君のボールから出てきたのは蝙蝠ポケモンの『ズバット』。

「ズバットの『パプー』です。クロガネジムとギンガ団との戦いではまだレベルが低くって戦闘に出せなかったんです」

「ふーん。それじゃあミコトはハジメと一緒にその子のレベル上げをしなが手持ちに加えたいポケモンを探しなさい」

「いいよ」「分かりました」

「じゃあ俺はその間に昼寝でも「シズクはあたしと一緒にミナツのサポートよ」えー・・・」

「文句ある？（スッ）」

「いえまったく！」

ポケットからスイッチを取り出されるのを見てあわてて否定する。脅しはよくないと思います・・・。

「一時間後にここに集合ね。ほらあたしたちは向こうに行くわよ」

「はい！」

「へーい・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「どう？」

「うーん、ビッパにムツクル、コリンクばかりです」

30分ぐらい歩き回ったが、三匹ともここに来るまでの間で見られるようなポケモンばかり。それにポケモンがほとんど出てこない。

「やっぱりおかしいよなあ・・・」

「シズクもおもう？」

「ああ」

「何がですか？」

まあ、旅に出たばかりじゃあ分からないか。

「ビッパとムツクルは比較的生息している数が多いよ」

「それがこんなにも数が少ないってことは、いるんだよ」

「なにがですか？」

そりゃあ勿論。

「他のポケモンが怯えるぐらい強いポケモンだ（よ）！！」

その途端、近くの水辺から三本の水柱が上がり、ポケモンが姿を現す。

『ギャアアアアアア！！！！』

「きやあああああああ！！」

「やっぱりな！」

「『ギャラドス』！」

凶悪ポケモンギャラドス。最も弱いと言われている『コイキング』の進化系とは思えないほどの巨体とパワーを持つ。どこの水場にも生息していて、釣竿で釣り上げることができる。

「けど、基本的には釣り上げないと姿を見せないのに・・・」

「ああして出てくるってことは何かあったんだろう！戦闘不能にするぞレンカ！頼むぞ！『リユウ』！」

「ええ！行きなさい！『ライガ』！」

『デーン!』

『レン!』

俺は『デンリユウ』のリューを。レンカは『レントラー』ライガをギャラドスに対峙させた。

「ライガ! 『影分身』!」

「リユーは『フラッシュ』だ!」

レントラーは影分身で分身を生み出しギャラドス達を攪乱し、その隙を突きリユーが強力な光を放ち、ギャラドス達の目を眩ました。

「シズク、一体に集中攻撃よ! ライガ、『雷の牙』!」

「リユー! 上を狙え! 『パワージェム』!」

一番陸に近いギャラドスの胴体にレントラーが噛み付き、電流を流し、リユーはギャラドスの顔にキラキラ光る無数の結晶をぶつけた。するとギャラドスの体はゆっくり傾き、レントラーが離れると水面に体を打ち付け、気絶した。

「よし! 残り二体!」

「あら? ミナツは?」

「えっ?」

レンカの声に反応してさっきまでミナツがいた位置を見ると誰もいなかった。

「おおおい! ミナツどこに行った!」

「あっ! あそこ!」

レンカが指を指す方を見るとミナツはいた。・・・ギャラドスがいる方に走っている。

「何してんのあいつー!」

丁度残りの二匹の目が回復したみたいで、攻撃対象をミナツに変更したようで、一匹は口に大量の水を溜め『ハイドロポンプ』を、もう一匹は口にエネルギーを溜め『破壊光線』を放とうとしている。

「まずいわ!」

「させるか! フィー! リユー! それぞれ口を狙って『シャドーボール』と『気合玉』!」

素早くボールからファイを出し、ファイが黒い球体を、リユーが黄色っぽい球体を生み出し、二匹のギャラドスに向かって撃つ。当たる直前に向こうも攻撃を放ち、お互いの技がぶつかり合い、爆発した。

「ライガ! 『ワイルドボルト』よ!」

「決めるリユー! 『雷』!」

爆発の煙が晴れた瞬間、レントラーが強力な電気を纏い一匹に突撃し、もう一匹にリユーが雷を放った。

ギャラドスに電流が流れ、二匹同時にゆっくりと倒れた。

「ふ〜」

「レンカさーん! シズクさーん!」

安堵のため息を吐いてると、ライガと一緒にミナツが何かを抱いて戻ってきた。

「ミナツ! 勝手にあんなとこに行ったら危ないでしょ!」

「ごっごめんさい! でも、この子が・・・」

そういいながらミナツが抱いていたものを見せる。

「この子は・・・」

「珍しいな、『ラルトス』か」

ラルトスはこのに生息が確認されてるが、なかなか姿を現さない珍しいポケモンだ。

「はい。この子があそこで震えてたから「危ない!」と思って・・・」

「シューンと項垂れるミナツを見て、レンカが『はぁ』とため息をついた。

「今度からは一言言ってから動くのよ」

「はい!」

「ところでそのラルトスどうするんだ?」

「えっ?」

俺の問いに対してミナツはキョトンとし、その後「う〜ん」と悩み決心したようにラルトスと向き合う。

「一緒に来る？」

『・・・ルー！』

ミナツの問いに少し悩んだが、嬉しそうにラルトスは返事した。

「うん！これからよろしくね！『ララ』！」

第七話

「あっ！レンカさん、ミナツちゃん！・・・ついでにシズクさん」

「失礼すぎるぞおい」

一時間後、元の場所にはミコトだけしかいなかった。

「あれ？ハジメさんは？」

「あっち」

「『リヨクヨク』、『エアカッター』！」

「ああ！ムツクル！」

ミコトが指した先では、ハジメが丁度『トロピウス』のリヨクヨクが相手のポケモンにとどめを刺したところだった。ちなみに負けたトレーナーの後ろには他のトレーナーとファンがずらりと並んでいる。

「ハジメさん、有難う御座いました！」

「どういたしまして。次は誰かな？」

「わ、私です！サインください！」

「いいよ・・・はい、どうぞ」

「あ、あの！できれば握手も・・・」

「・・・時間かかりそうだな・・・」

「そうね」

「ミコト君、そっちはどうだった？」

「手持ちは増えなかったかな。けど、代わりに結構レベルが上がったよ。そっちは？」

「ギャラドスに襲われて大変だったよ」

「ええっ！大丈夫？怪我は？」

「大丈夫だよ！それに新しい子も加わったんだ！ラルトスのララッて言うの」

「へへ」

く20分経過く

「・・・まだ終わらないな・・・」

「無理矢理連れてこようかしら？」

「やめとけ。お前目当ても出て来て二人とも動けなくなるのがオチだ」

「・・・そうね」

くさらに20分経過く

zzzz・・・

「見つけましたわよハジメ！！」

うおっ！いかんいかん。退屈すぎて眠ってしまった。

「久しぶりだねミリーさん」

「『久しぶりだね』ではありません！クラウドと共にどれだけ探したと思いますか！」

？なんかもめてるな。ファンじゃないのか？

「レンカ、見覚えはないか？お前ハジメと一緒に旅してたんだろ？」

「どうだったかしら？」

「あの女も一緒にいるんでしょう！さっさと出しなさい！

「『あの女』ってお前の事じゃないのか？」

「そうかしら？ちよっとなってみるわ」

「ちよっと待て。おゝい二人ともく、ハジメのどこ行くぞく」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あつ、皆」

「どうしたはじめ？」

「何かあったの？」

向こうに行くとはジメが相手に詰め寄られていたが、レンカの声を聴き、素早くこちらに振りかえった。

こつちを見た相手は本来なら可愛らしい顔なのだろうが、こちらを見る表情は憤怒の形相だ。

「レンカ！とうやく見つけましたわ！あの日の恨み！今晴らしますわ！」

ビシッ！とレンカ身に指を指した。やはり恨みの対象はレンカのようだ。当の本人は目をパチクリしているが、やがて怪訝そうな顔で口を開いた。

「・・・あなた、誰？」

ピシッ！という音と共に、彼女は指を指したまま石になった。

「そりゃないだろレンカ」

「あの人かなり恨んでるみたいですよ」

「ホントに覚えがないんですか？」

「・・・ないわね」

「お、覚えてないというの・・・！？この私、ミリー・バーネットを・・・！」

「お、お嬢様！お気を確かに！」

フラッと倒れそうになる彼女を、どこからともなく現れた燕尾服を着た青年が支える。

「あなた方三人には『初めまして』ですね。私、バーネット家に仕える執事のクラウスです」

「ああ、あの資産家の？」

「ええ」

バーネット家は世界でも有数の資産家で、たくさんの珍しいポケモンを持っているらしい。

「レンカ・・・お前何やったんだよ」

「んゝ、あっちの執事は見覚えがあるんだけど・・・」

「私・・・あの女にとってクラウスより眼中にないと・・・!？」

「お嬢様!お気を確かに!」

ああ・・・レンカの言葉でさらに（精神的）ダメージが増えている・・・。

「ほらレンカ。二年前のカントーリーグの後のパーティであつたでしょう?」

「二年前・・・?カントーリーグの後のパーティ・・・?」

ポクポクポクポクポク・・・チーン!

「ああ!あのときの!」

「何が覚えがないだ!やっぱりあるんじゃないか!」

「フ、フフフ・・・。ようやく思い出したようですね・・・!あのときの恨み!晴らさせてもらいますわ!行きますわよ、クラウス!」

「何よ!あれは自業自得でしょう!」

「そうゆうわけで、私もリベンジさせてもらいます。ハジメさん」

「よろしく、クラウスさん」

「戦闘方法は前と同じ、使用ポケモンがそれぞれ2匹ずつのダブルバトル。審判はシズク。いいわね?」

「勿論!」「うん」「結構です」「へゝい」

それぞれがボールを構える。

「始め」

第八話（前書き）

お気に入り登録有難う御座いました！ s n o w w h i t e さんも感想有難うございます！

ポケモンの名前に漢字を使おうと思うのですがどうですか？感想で多数決を取りたいと思っています。なお、ミリーとクラウドの設定はこのバトルの決着が着いてから更新したいと思っています。

第八話

「お行きなさい、『ハガネール』！」

「頼みますよ、『オオスバメ』！」

ミリーさんが出したのは巨体を誇る鋼・地面タイプの鉄蛇ポケモンのハガネール。クラウスさんが出したのはノーマル・飛行タイプのツバメポケモンのオオスバメ。

「叩きのめしなさい！『ハテン』！」

「咲き誇れ！『サクラ』！」

レンカが出したのは鋼・格闘タイプの波動ポケモンの『ルカリオ』。ハジメは草タイプのサクラポケモンの『チェリム』。

「ハガネール、『アイアンテール』よ！」

『ハゝガゝネッ』

「「避けて！」」

ハガネールは纏まっている二匹に向かって尻尾を叩きつけようとするが、ハテンとサクラは左右に分かれて躲す。

「オオスバメ！チェリムに『電光石火』をしながら『燕返し』！」

『スッバァ！』

ハガネールの尾で分断されたチェリムに猛スピードで突っ込んでくる。

「『守る』だ！」

『チェリッ！』

その攻撃に対してチェリムは緑色の透明な膜のような物で身を守り、突っ込んで来たオオスバメは弾き飛ばした。

「ハガネール、ルカリオに『炎の牙』！」

『ハガッ！』

「ハテン！ハガネールの顔に『波動弾』！」

『ルカッ！』

「サクラ！ハテンに『手助け』！」

『チェリ！』

向かってくるハガネールの顔を迎撃するため、波動弾を撃とうとするルカリオに、チェリムが力を送ろうとする。

「尻尾でチェリムを払いなさい！」

『ハッガア！』

「チェリ〜！』

「サクラ！」

しかし力を与えようとして動けないチェリムをハガネールが尾で薙ぎ払う。

「ハテン、構わず撃ちなさい！」

『ルウツカア！！』

「オオスバメ、波動段に『エアスラッシュ』！」

『スッバア！』

あと僅かのところで波動弾はオオスバメのエアスラッシュとぶつかり爆発。ハガネールは爆煙を突っ切り、ルカリオに炎を纏った牙で食らいつく。しかしルカリオはハガネールの上顎と下顎を手足で閉じないように抑えている。しかしあのままだと炎でじわじわと体力が削られるだろうな。

「ハテン！」

「しぶといですわね！ハガネール！もっと力を込めなさい！」

「オオスバメ、ルカリオにエアスラッシュ！」

どうやら先にルカリオを倒そうと決めたらしい。オオスバメが上昇し、ハガネールの口の近くに行く。確かにあの高さじゃチェリムの攻撃は簡単に躲せる。けど、それじゃあ足元掬われるよ？

「サクラ、ハガネールに『草結び』！」

ハガネールの下の草がハガネールの尾を縛り、ハガネールの体が傾く。

それによりオオスバメの放ったエアスラッシュはハガネールに直撃。その隙にルカリオはハガネールの口から脱出した。

「クラウス！何をやっているんですの！」

「も、申し訳ありません、ミリーお嬢様」

ハガネールに攻撃を当てた事にミリーさんがクラウドさんに怒鳴り、クラウドさんが謝っている。

けどお二人さん。

戦闘中に目を離しちゃ駄目だよ？

「サクラ、『日本晴れ』！」

チェリムの日本晴れで一定範囲の日差しが強まる。そしてチェリムはネガフォルムからポジフォルムへと変化する。

「一気に攻めるわよハテン！オオスバメに『神速』！」
ルカリオが猛スピードでハガネールの体を登り、上空のオオスバメに近づく。

「ま、まずい！オオスバメ、エアスラッシュ！」

「ハテン！波動弾！」オオスバメのエアスラッシュとルカリオの波動弾が再びぶつかり合うが、今度は相殺されず、波動弾がエアスラッシュを掻き消し、オオスバメに直撃した。

「あれ？さっきは相殺したのに……。シズクさんどうしてですか？」

バトルを見ていて疑問に思ったミナツが俺に質問してきた。その疑問！お答えしよう！

「それは「チェリムの特性だよ」……」

悲しくなんてないさ。セリフ取られたからって、悲しくなんかないさ！

若干沈んだ俺の後ろでミコトが説明を続ける。

「チェリムの特性は『フラワーギフト』って言って、日差しが強い状態だと自分と味方の能力が上がるんだ。他にも『葉緑素』の特性を持つポケモンなら素早さが二倍になるし、『サンパワー』の特性を持つポケモンは体力がだんだん減る代わりに特攻が上がるよ。ちなみに日差しが強い状態だと炎タイプの技の威力が上がって、ソーラービームなんかは溜めずに撃つことが出来るんだ」

「へー、そうなんだ・・・」

「くっ！ハガネール、振り落すのよ！」

「飛び降りて！」

ルカリオは、振り落される前に飛び降り、空中で体制を整える。

「相手は逃げられないわ！もう一度炎の牙！」

「オオスバメ、ツバメ返し！」

「ハテン！オオスバメに『ブレイズキック』！」

ルカリオは足に炎を纏わせ、オオスバメに対峙する。その間もハガネールが向かってくるが

「サクラ！ハガネールに『ソーラービーム』だ！」

チェリムが下からソーラービームを放ち、ハガネールの顎に直撃させる。ハガネールの攻撃は止まり、ルカリオのブレイズキックとオオスバメが燕返しがあぶつかり合うが、フラワーギフトで能力が上がり、日本晴れで威力が上がったブレイズキックに対抗できる訳もなく、蹴り落とされる。

「そのままハガネールに波動弾！」

「サクラ、ソーラービーム！」

さらに、顎に攻撃を受けた為、ふらついているハガネールに同時攻撃する。

ハガネールは地面に倒れ伏し、オオスバメもちょうど落ちてきて、そのそばにルカリオが着地した。

「ハガネール、オオスバメ、共に戦闘不能」

「ハガネール、戻って」

「よく頑張りましたね」

「お疲れ、ハテン」

「サクラ、戻っておいで」

全員がポケモンを戻し、新たなボールを構える。

第九話（前書き）

今回は別のキャラ視点でお送りします。

第九話

レンカside

「焼き尽くせ！ヒリユウ！」

「切り裂け！リョクオウ！」

「現れましたね忌まわしき黒いリザードン！」

私がヒリユウを出した途端、彼女（ミリー）が憎しみのこもった眼でヒリユウを睨みつけた。

「あの、ミリーさんに何があっただんですか？」

「自業自得よ」

ミナツちゃんが私たちに近づいてきて理由を尋ねるが、私があっさり返すと目をパチクリさせた。

「あれは私がカントーリーグを優勝した時のことよ……。」

.....

あの後パーティーが開かれ、偉い人たちが私とハジメのポケモンを一匹連れて来てほしいと頼まれたからそれぞれヒリユウとリョクオウを連れて出席したのよ。

そのパーティーの途中で彼女がお金は払うからヒリユウを譲って欲しいと言ってきたの。当然断ったわ。そしたら彼女、私が勝ったらヒリユウを貰うって言ってバトルを仕掛けてきたの。勿論私が勝ったわ。

けど最後の火炎放射が彼女の髪に当たって、彼女の頭は黒焦げでチリチリパーマになって会場は笑いに包まれたわ。

.....

「つてことがあつただけよ」

「何が『あつただけ』ですか！ おかげで私は一生の笑いもの！ 髪が元に戻るまでどこにも行けなかつたんですのよ！」

「お嬢様落ちていて！」

「何よ、バトル中にポケモンの技がトレーナーに向かうなんてよくあること。避けれない方が悪いのよ」

「何ですってええええええええええ！」

「ちなみにその間、僕はクラウドさんとバトルしてたんだ」

「へーそうだったんですか・・・」

横ではハジメがミナツちゃんに軽く補足説明をしていて、その後、危ないからと離れさせた。

「あの時の借り！返させてもらいます！『ボーマンダ』！」

「お願いしますよ！『アブソル』！」

向こうのポケモンはドラゴン・飛行タイプのドラゴンポケモンのボーマンダと悪タイプの災いポケモンのアブソル。二体とも高い攻撃力で有名なポケモンね。

「始め」

「ヒリユウ、手始めに『熱風』よ！」

「アブソル、
『守る』！」

「ボーマ^ンダ、上昇よ！」

前のバトルの日本晴れで威力が上がっている熱風を、アブソルは防ぎ、ボーマンダは飛び上がって回避した。

「逃がさない！ボーマンダに『辻斬り』！」

「させませんよ！アブソル、不意打ち！」

ボーマンダを狙うジュカインを熱風から逃れたアブソルが死角からぶつかり、叩き落とす。

「ハジメさん、あなたは私が相手をします」

ハジメとジュカインの前に立ちふさがるアブソルとクラウスさん。これで向こうからのサポートは期待できないわね。

「隙有り！『竜の息吹』！」

動きが止まっているヒリュウにボーマンダが遠距離攻撃を仕掛けてきた。それなら！

「押し返して！『火炎放射』！」

ぶつかり合う竜の息吹と火炎放射。しかしすぐに火炎放射が押しだす。

「くっ！やはりこの天気で遠距離は・・・！ボーマンダ！接近して『ドラゴンクロー』！」

神戸気を中断して火炎放射を躲し、火炎放射に沿ってボーマンダが接近してくる。

「受けて立つわ！こっちもドラゴンクロー！」

火炎放射を中断し、真っ向からぶつかり合うヒリュウ。空中で何度もぶつかり合うが少しずつヒリュウが押されだし始めた。

「くっ！」

「パワーではこっちが上のようにすわね！叩きつけなさい！」

しっぽを大きく振り、ヒリュウを地面に叩き落とされる。

「ヒリュウ！『竜の舞』！」

その指示とほぼ同時にヒリュウは落下し、地面を滑り、粉塵が舞い上がる。

ハジメside

リザードンが叩き落とされた方を見ると粉塵が巻き起こり、リザードンの姿が隠れていた。

「余所見とは余裕ですね！連続で辻斬り！」

「！『リーフブレード』で受け止めるんだ！」

「

頭の刃から切り付けてくる辻斬りをリーフブレードで受け止める。

もしあのアブソルの特性が『強運』だとすればまともに受ける訳にはいかない！強運は相手のポケモンの急所に技が当たりやすくなる特性。アブソルの覚える辻斬りと『サイコカッター』、『切り裂く』

は、相手のポケモンの急所に当たりやすい技。食らう訳にはいかない・・・！向こうも危ないし、一氣に決める！

「リョクオウ！一氣に攻めるんだ！」

「甘いですね！不意打ち！」

リーフブレードを放つ瞬間、再び死角から迫るアブソル。けど・・・

「同じ手は食わない！『見切り』！」

「なっ・・・！」

見切りは絶対防御の守るとは違い、相手の攻撃を見切って躲す完全回避。迫るアブソルを躲した瞬間、アブソルに隙が生まれた！

「リョクオウ、『シザークロス』！」

腕の葉を十字に振るい、アブソルを切り付ける。

シザークロスは虫タイプの技。悪タイプのアブソルには効果は抜群。さらにアブソルは攻撃力が高い代わりに防御力は低い。

「戦闘不能・・・ですね」

つまり、高威力の効果抜群の技をともに食らえば、一撃で戦闘不能になってしまう。

「リョクオウ、お疲れ様。ゆっくり休んで」

「？援護はしないんですか？」

「恐らくもうすぐ決着が付きます。それより気になることが・・・」
周囲を見渡すがやはり見当たらない。

「どこ行っただろシズク・・・？」

レンカside

粉塵が晴れるヒリュウは立っていた。

「行けるわね？ヒリュウ」

私が確認するとヒリュウはゆっくり頷いてボーマンダを睨みつける。

「行きなさい！ヒリュウ！」

『ドーン！！』

私の言葉に返事をするように吠えたと猛スピードでボーマンダに接近する。

「さっきまでより速い！ボーマンダ、ドラゴンクロー！」

「遅い！ドラゴンクロー！」

ボーマンダが反応するより速くヒリュウの爪がボーマンダを切り裂く。

「い、一体どういうこと！」

「私が落下する前に指示した竜の舞はポケモンの素早さと攻撃力を上げる技よ。今ならボーマンダにも力負けはしないわ」

「くっ！ボーマンダ、ドラゴンクロー！」

「ヒリュウ！こっちもドラゴンクロー！」ぶつかり合う爪と爪。さつきとは違い、明らかにヒリュウが押している。そして、

「！ボーマンダ！」

再びドラゴンクローが直撃し、ボーマンダは地面に落下した。

「私の勝ちね」

ヒリュウをボールに戻し、ミリーに言うと、彼女はボーマンダを戻し、立ち上がった。

「次は負けませんわ！クラウス！行きますわよ！」

「はっ！では皆さん、また」

そういつて二人は車に乗り、去っていった。

「ねえ皆。シズクの姿が見えないんだけど・・・」

「えっ！」

「あっ、ホントですね」

ハジメの言葉を聞き、周囲を見渡すと確かにシズクの姿が見えない。

「まさか逃げた！」

そう思って発信機の反応を探す為に受信機を取り出そうとすると、ミコト君に肩を叩かれた。

「何！？」

「シズクさんならあそこに・・・」

ミコト君が指差した方にはさっきヒリュウが落ちた場所・・・の先の池。そこにはシズクが俯せで力なくプカ～と浮いていた。

「シ、シズクーーー！！」

「一体何が！」

「リザードンが地面に落ちて滑った時に撥ねられてましたよ」

「私のせい！？」

「ミコト君！気づいてたなら助けようよ！」

「とりあえず早く引き上げよう！」

私達は慌ててシズクを引き上げ、ソノオタウンのポケモンセンターに飛んだ。

その間シズクはピクリとも動かなかったけど・・・生きてるわよね・・・？

第十話

目が覚めるとポケモンセンターの天井が目に入った。

「……えーっと」

何があったんだっけ？

確かクラウドさんのアブソルとハジメのジュカインのバトルを見ていて……。そこから先が思い出せない……。

『シュン』という扉の開く音が聞こえ、視線を向けると見慣れた姿のジョーイさんが入ってきた。

「あっ！目が覚めたんですね

「ここは……？」

「ここはソノオタウンのポケモンセンターです。あなた、二日も眠ってたんですよ」

「二日あ！」

いったい俺の身に何が……！？

「ここに運ばれてきたときは大変な状態だったのよ。全身打撲に所々に擦り傷。体温の低下、呼吸も弱くなっていたわ」

ホントに俺の身に何があったんですか！？気になったがジョーイさんも知らないだろうしハジメ達に尋ねることにした。

「あの……。俺を運んできたのは？」

「レンカさん達よ。今あなたが目に覚めたことを連絡したからすぐに来ると思うわ」

流石ジョーイさん、行動が早い。

十分後……

「「シズク（さん）！」」

「お前ら、センターで大声出すなよ……」

ミコト以外の三人が慌てて部屋に駆け込んできたので呆れた顔で注意すると三人共文句を言いだした。

「何言ってるのよ!」

「そうですよ!」

「心配したんだよ!」

ああ・・・そんな大声出すと・・・。

「皆さん! 心配だったのはわかりますけど、静かにして下さい! 他の方々に迷惑です!」

「「す、すみません・・・」」

「シズクさん、無事だったんですね(チツ)」

「ミコト、今舌打ちしただろ」

「そんなわけないじゃないですか。心配したんですよ(にこっ)」
嘘くさい笑顔だなあ・・・。俺、なんか嫌われるようなことしたっけ?

まっ、今はそれより全員に聞きたいことが・・・

「なあ。俺の身に一体何があったんだ?」

「「「・・・ゑっ?」」」

「・・・ん? どうした・俺、なんか変なこと言ったか?」

「・・・覚えてないの?」

レンカが恐る恐るといった風に聞いてきたが、俺の記憶には何もない。

「? ああ。アブソルとジュカインのバトルを見ていた筈なんだが気が付いたらここで眠っていた」

「・・・よかった、覚えてない・・・」

「ん? 何か言ったか?」

「い、いい何も!」

「? そうか。とりあえず俺に何があったんだ?」

「それはですね、バトル中にレ「あああーーーーー!」」

「な、なんだレンカ!? いきなり大声を出して!」

「あ、あはは・・・」

喋り始めたミコトの口をいきなりレンカが大声を出しながら塞いだ。
ミコトはまだ何か喋ろうとしていたが、レンカに睨まれて、口を動

かすのをやめた。

「・・・で、結局何があったんだ？」

「え、ええっと・・・」

「・・・（じゅっ）」

「や、野生のポケモンですよ！」

どもるレンカを半目で見つめ続けると突然ミナツが答えた。

「野生のポケモン・・・？」

「そ、そうです！」

「野生のポケモンがシズクに横から体当たりして池に落としたんだ！」

「そっ、そうそう！」

「ホントか？」

焦ったように答える三人に不審な視線を送り続ける。

「何よ？信じてないの？」

「い、いいえ！へっソウダッタんだ」

例のスイッチを見せつけてくるレンカに慌てて答える。

・・・深く突っ込んではいけない。それが長生きのコツだと学んだ。

第十一話（前書き）

二週間も放置してすいません！ではどうぞ！

第十一話

「さて、シズクも目覚めたしハクタイシティを目指しましょう」

「はい！」

「あり、ちよつといいか？」

「・・・何よ？」

勢いが削がれたのか、若干不機嫌そうに返事をするレンカ。

「実はソノオタウンに來たらちよつと行きたいと思つたいた場所があるんだ」

「何処よ？」

「ソノオの花畑」

実はこのソノオの花畑、俺が帰ってきた理由の一つだったりする。様々な花が咲き誇るソノオの花畑。この土を木の実の育成に使えないかと思つて調べに來たかつたんだ。

「数十分でもいいから時間くれないか？頼む！」

「・・・はあ、分かったわ。私達は205番道路でミナツとミコトの特訓をしてるから用事がすんだら205番道路に来ること。ちなみに逃げようとしたら・・・」

「わ、分かってるって……。そんじゃ、またあとで」

例のスイッチを見せつけられ、俺は若干怯えながらそう返しソノオの花畑に向かった。

[illegible]

「へえ、これはすごい……！」

視界いっぱい広がる色とりどりの花。ジョウト、ホウエン地方を回ってみたがここまで見事な花畑は見た事ない！

「おら！その甘い蜜を渡せって言ってんだろ！」

「そ、そんなこと言われても・・・！」

「さて、それじゃあ早速・・・」

鞆の中から取り出したのはスコップと木の実プランター。この木の実プランターはジョウトにいる時仲良くなったフラワーショップから貰ったもので旅をしながらでも木の実を育てられる優れたもので重宝している。

「いい加減に言うこと聞かないと『スカンプー』の臭い液体かけちまおう！」

「ひ、ひいいいいい！！！」

この木の実プランターにこの土を入れてっと。んゝとりあえずオレンの実様子を見てみるか。オレンの実を植え、カバンにも出して立ち上がる。

「よし。それじゃあ合流するか」

「ってちよつと待て！」

レンカ達と合流しようと出口に向かおうとすると先程から視界の端でおじさんを変な風に脅していた水色のおかっぱ頭の“G”と刺繍された変な服を着ている男に呼び止められた。

「そこまで完璧に無視にされたらさすがに傷つくぞ！普通ここはおじさんを助けるべきだろう！」

「そうか。でも俺はそんな水色おかっぱで個性の欠片もない怪しい集団のメンバーには正直関わりたくない」

「ひ、ひでえ！俺だって好きでこんな格好しているわけじゃねえ！この髪だって、無理やり染められてカットされたんだ！」

「そんな髪と恰好を強制的にさせるなんて・・・まともな組織じゃないな」

「うう・・・俺だって本当は辞めてえよ・・・月一回の強制染色

にカット。服もこれ以外処分されたから休みの日も外を一人で歩いてたら通報されるし、給料は安いし、人員がギリギリだから辞めたくても辞めさせてもらえねえんだ……！」

「酷いなおい……！」

「うう……苦労してるんですね……」

何時の間にか先程脅されていたおじさんも涙をハンカチで拭いていた。

「他にもな……（省略）」

「俺もな……（省略）」

「実は私も……（省略）」

〽数分後〽

「いやぁ……なんかすっきりしたよ」

「俺もなんかすがすがしい気分だ」

「私もです」

お互いに愚痴や不満を言いあった俺達はどことなく生き生きした表情になった。

「決めた。俺、ギンガ団を内側から少しづつ崩そうと思う」

「そうか……よし、微力ながら俺も協力しよう！」

「い、いいのか!？」

「ああ!お互い辛いことを知り合った俺達はもう親友だ!」

「親友……俺が親友でいいのか!」

「ああ!俺の名前はシズクだ!お前は?」

「俺はレンジだ!よろしくなシズク!」

「こちらこそだレンジ!」

「早速だがシズク、これを」

お互いに名乗りあった俺達はがっしり握手したあと、レンジから鍵を渡された。

「これは?」

「ソノオタウンのすぐ近くにある『谷間の発電所』の鍵だ。今あそ

ここにはうちの幹部の一人の『マーズ』っていう奴が占拠してんだ」
「何で？」

「理由は分からねえが大量の電気エネルギーを集めるためらしい。
シズクにはそれを妨害して欲しい」

「レンジはどうするんだ？」

「俺は本部に報告に戻って同志を集めながら情報を集める」

「そうか、何か分かったら連絡してくれ」

「ああ、じゃあな！親友よ！」

「おう！」

お互いに電話番号とアドレスを交換するとレンジはボールから出した『エアームド』に乗って飛び立った。

「・・・うし！俺も行くか！フライ！谷間の発電所へ！」

それを見送った後、俺もフライに乗り谷間の発電所に向かった。

第十二話

フライに乗って移動すること数分後、205番道路の先に建物が
見えてきた。

「あれが谷間の発電所か・・・フライ、あの建物の前に降りてくれ」
『フラッ!』

フライは俺の指示どおり発電所の前に下ろしてくれた。しかし正
面に降りたことですぐにおかしなことに気付いた。

「扉が開いて・・・る?」

しかもただ開いてるという訳ではない。どう見ても無理やり開け
たとは思えないようにドアが今にも外れそうな感じだ。

「・・・まさか」

若干嫌々な予感がしつつも、確認しない訳にもいかないので中を
覗いてみると床に何人ものギンガ団の下っ端が転がっており、上か
らは何かが暴れるような音と数名の声がか聞こえてくる。俺はこそ
こそと階段を上がり

そつと二階を覗いてみた。

「『ドータクン』は“守る”! 『ブニャット』は“切り裂く”! ち
よつと! プルートの爺さんも何とかしなさいよ!」

「わしは研究者だ! ポケモンバトルなど専門外だ!」

「ああもう! 役に立たないわねえ!」

「余所見してる余裕はないわよ! 『ミズキ』、“波乗り”!」

「『ハスハ』、“エナジーボール”!」

「『レン』、ズバットに“アクアジェット”!」

「ズバット!」

「くそ! スキャンプー、“どくどく”!」

「させない! 『ココ』、“神秘の守り”!」

「くっ！この餓鬼ども・・・！」

「うわわわあああ！！発電所のデータがあああ！！！」

恐らく“雨乞い”でもしたのか、室内なのに雨が降っており、幹部らしき女のブニヤットとドータクンに対し、レンカはミロカロスのミズキで、ハジメはルンパツパのハスハで対抗しており、ミコトとミナツはそれぞれ新しく捕まえたらしいブイゼルとケイコウオで下っ端二人のズバットとスカンプーの二匹と戦っており、その傍で発電所の人間らしき人物が雨で濡れたパソコンを見て頭を抱えて絶叫していた。

「・・・放っておいても大丈夫そうだな」

俺はこっそり外に出ようとした。しかし・・・

「逃げるな！（ポチッ）」

「ギイイイヤアアアア！！！」

・・・気づかれてたか・・・。

俺はボンッ！と何かが爆発したような音と発電所の人間の

「あああああ！今の電流で完全にパソコンが壊れたあああああ！！！」

という絶叫を最後に意識を失った。

第十三話（前書き）

今回はバトルはありません。

第十三話

俺が気絶している間に谷間の発電所からギンガ団を追い出したレンカ達を、発電所の人達は涙を流しながら（恐らく発電所のデーターがすべて失われたため）見送り、俺達は今ハクタイの森を同行者を加えて移動している。

「本当にすみません・・・」

「いやいや気にしないでくれモミさん」

モミさん
彼女はこの森を抜けてハクタイシティに行きたいそうなのだが、ギンガ団に怯えて一人でこの森を抜けるのが不安だったそうで、丁度森を通る俺達に同行させてくれるように頼んできた。

「・・・（ジ）」

「・・・レンカ、こっちにそんな睨むような視線を送るのやめてくれないか・・・？」

「気のせいじゃない？ そんな視線送ってないわよ」

「いやいや・・・」

めっちゃこっちに視線刺さってるんですが！？

「シズクさんって鈍いんですね・・・」

「学生時代からそうだったよね」

何のことだハジメ？ 大体モミさんがお前と話すとお前の餌食になるからお前から引き離してるんだぞ。

「人として終わってますね」

「シズクさん、それはひどいです」

「えっ！何が！？」

モミさんからもダメ出しを食らった！それとミコト、お前俺のこ
と嫌いだろう？

「今気づいたんですか？」

「心読まれた！？そしてその言葉に傷ついた！俺の一体何処が嫌いなんだ！？」

「存在自体です」

「さらに傷を抉られた!!」

存在自体、か……。ここまで酷い言葉を投げかけられたのは初めてだ……。

「ま、まあまあ。そのうちいいことがあるよ」

「今はないのか!？」

「ああ……。えっと……。」

「否定されなかった!？」

「あなたの存在ならいくらでも否定しますよ?」

「やめて!?!」

「……。あの、ミナツちゃん? いつもこんな感じなんですか?」

「まあ、大体」

お知らせ

申し訳ありませんが、ネタが詰まってしまったため、しばらく『ポットモンスター 幼馴染の受難』をしばらく休載することにしました。

まだたいして連載していないのにPVが30,000、ユニークが5,000を超えていて、私の作品を読んでいただいていると思うととてもうれしく思う反面、前回の小説削除に続き、今回の休載のことで自分自身を不甲斐無いと思ってしまいました。

まだ再投稿は何時になるかわかりませんがその時を楽しみにお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4986s/>

ポケットモンスター 幼馴染の受難

2011年11月13日03時24分発行